

徐々にではあるが・



十一月の寒さを体験していると、いつの日か日本は四季の国ではなく、二季の国になっていくのではないかと、真剣に考えてしまいます。

少なくとも十一月にコートを着た記憶はない。

先月号では、残念な日本企業の話を見せて頂いたが、その後も日産、スバル、三菱マテリアルとメディアを賑わしているのはご承知の通り。

勿論、ルールを守らないのはよろしくないが、いずれも社内基準やルールの変更に臆病なことが事の根本にあるように思えてならない。

逆に、リーフやアイサイトの最終出荷検査を、人に頼っている事実の方が、よっぽど怖い気がする。

まして、「輸出車は輸出先の基準に則っているから問題ない」とは、要すれば国交省への届出や基準が古びたものである、ということの表れではないか。

また、大規模リストラについて銀行の方に伺ったのだが、「そもそも五十歳になれば銀行本体に残る人員は限られているので、新卒者の採用を抑えれば、自ずと公表している様に人員が減っていくだけ」とのこと。

企業努力はしない、ってこと？

また、何かあつたら国が助けしてくれるだろう、ってこと？
荒れ気味になりそうなので、ここら辺りで止めておく。

さて、セルドロン。

静岡県伊豆の国市におけるとある案件で採用が決定した。

今月中旬頃の施工予定で、共同研究をして頂いている京都大学・澤村先生と生徒さんにご見学頂くこととなっている。

これまで複数の学会で論文発表頂き、そしてデータ収集の為に、日々研究室でセルドロンと格闘しているお二人ながら、ここまで現場を見て頂いていないのは、全く以て我々の気配りの無さ。大変失礼しました。

来月号にはそのご報告が出来るであろうが、是非、実際の現場で使用される様子を見て頂き、今後の研究に活用して頂きたい。

また、この案件が起点となって、静岡県内の農業土木に限らず、既存のセメント系ポリマー系では環境負担があるような案件で土依に乗れるようになっていければと、切に願っている次第。

更には、伊豆の国市と言えば、

長岡生コンクリート

GNN

以前より何度かご紹介させて頂いた余った生コン、通称「残コン」については、GNNを中心にチーム・残コンフォーラムが全国行脚の旅を続けて貰っていて、既に三十県でデモを敢行されたと聞いている。

お陰様で、徐々にではあるが反響も頂戴しており、「継続は力なり」をまさに体現してくれており、頭が下がる思いである。

元気な生コンネットワーク技術発表会ブース出展

十一月十八日(土曜日)の「土木の日」に「生コンは人を守る」と題して**生コン4団体共催プログラム**が開催された。

弊社セルドロンもブース出展し、当日は二百名を超える超満員の来場者数だった。

生コン・残コン・コンプライアンス・防災・ICT・女性活躍と多岐にわたる内容で、現状を改善・打破しようと考えている参加者様へセルドロン価値をご紹介させて頂きました。

毎年参加しておりますが、残コンのブースには毎年多くの人が集まっています、それは残コンに大きな問題があることを意味しています。

生コン出荷量の2〜3%が残コンになっているといわれているが、

2〜3%と認識するのではなく、東京ドーム2つ分(約250万³m)の生コンが余っていると考えたほうが解りやすい。兎にも角にも、残コンがなくなるようにセルドロンの営業活動を推進していこうと思えます。

ぜひ、セルドロンをお試しくください。

生コン4団体共催の4団体とは？

全国生コン青年部協議会

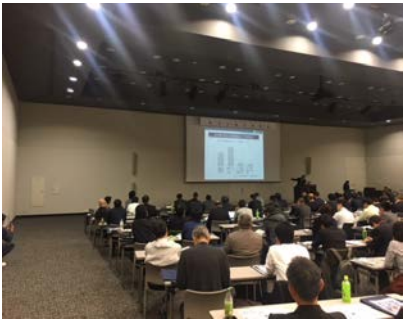
全国コンクリート圧送事業団体連合会

再生骨材コンクリート普及連絡協議会

元気な生コンネットワーク



おなじみのセルドロンブース



技術大会の様子



託児所完備のイベントでした



ため池の浚渫土の処理にセルドロン採用決定

ため池の浚渫土の処理に、セルドロンが採用されることになりました。

今年の3月には、東京の佃公園(佃川)の浚渫土の改質にセルドロン6トン使用しましたが、今回は25トンオーバーのオーダーがありました。

ため池の底にある280³mの浚渫土をセルドロンによって瞬時に改良し、作業効率を大幅に改善いたします。

バキューム車を使ったら何台で何日で・・・

セメント系固化材をしようしたら、近隣の田んぼに影響があるかも・・・こんな困ったが、セルドロンによって打破されました。セルドロンは自然由来のセルロース繊維が主成分のため環境にやさしい商材です。

詳細等は次号でご報告させていただきます。

セルドロン研究員Xのコラム

「テーマ 土壌汚染を考える(3)POPs偏」

海洋からPOPsを含んだ水蒸気が雲になり、やがて雨となって土壌に降り注ぐ。

このように、今も地球上を有毒物質がグルグル循環しています。現在は、多くのPOPsは製造、使用が厳しく制限されているが、それは先進国の話である。

これを防ぐには、この世からPOPsをなくせばいい話だけど環境中に飛散したPOPsを回収、浄化することはなかなか難しい。POPsの処理、無害化、分解といったことは、

日本ではかなり進んでいる。

とりわけ化学、物理的処理が基本であるが、しかし土壌中に広範囲に分布した化学物質をすべて、無害化するにはお金がいくらあっても足りません。

もつとも安く済ませるには、微生物による無害化や分解いわゆるバイオレメディエーション実用化技術の開発がいいと私は考えます。